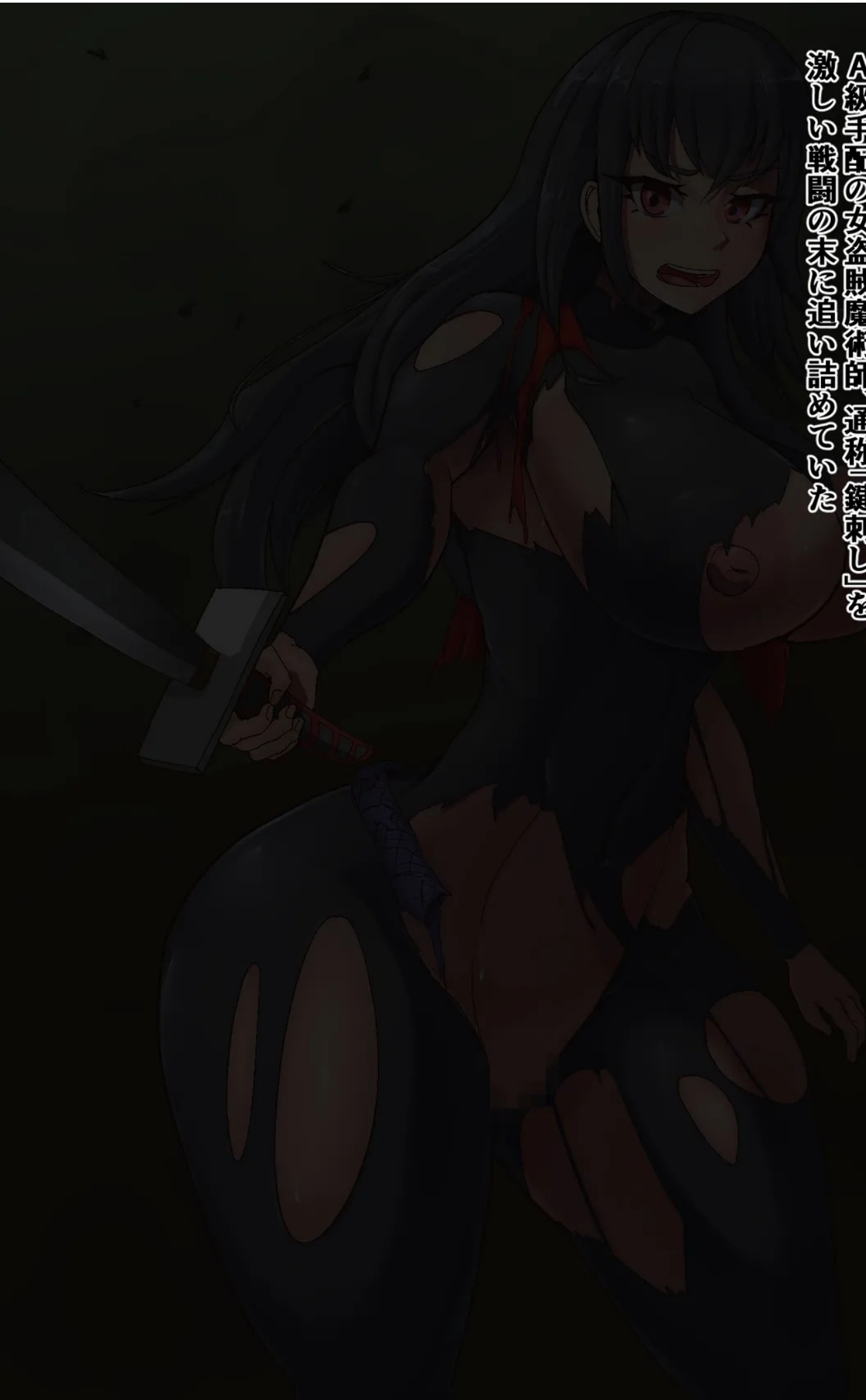




おなな化魔具で  
ガッ戦闘力になり  
敗北服従変態堕ち

違法魔術や魔具の取り締まりのプロフェッショナルたちの集団  
魔警察のナンバーワン魔警、「火涼」は  
あらゆる魔術錠を解除し、数々の古代魔具を盗み出してきた  
A級手配の女盗賊魔術師、通称「鍵刺し」を  
激しい戦闘の末に追い詰めていた





「はあはあ…もう貴様に打つ手はない！  
盗み出した古代魔具を差し出して投降しろ！」

ガッ！

「くそっ！なんて奴！今までかき集めた強力な魔具を  
全部使って攻撃したのに…！  
くっ…こうなったら背に腹は代えられないわね…」





「これでどうだ!」

「くっ、しまった! 転送魔術か!  
これはまさか例の古代魔具か!」

「正解よ! 手に入れたてで効果も把握できてない  
古代魔具だけど一か八かよ!  
その魔具には付けた者の魔力と動きを  
完全に封じる力があるらしい...という話よ!」

「なんだと!」

ガ

チッ!





「…ん？何も身体に異常は感じない…  
普通に魔術も使えそうだな？」

「な、なに!？」

「残念だったな！  
情報がガセだったか偽物でも掴んでしまったのか  
いずれにせよこれで貴様の命運は尽きた！  
大人しく投降し…!」





「ろほお!!」

「うえり!!、股間から何か生えてきてる!!  
まさかこれが古代魔具の作用なの?」



「おうっ!!」



ぽるん♡



「な、なんだこれは!!わ、私の股間に…!」

「ち、ちんぽが生えてる…?!  
下着みたいな形で妙な魔具だとは思ってたけど…  
これって本当はただの悪ふざけ用の道具なんじゃ!」



ズン♡

「よ、よくもこんなモノを…！覚悟しろ！」

キッ!

「ま、まずいっ！くそっ！最悪！  
まさかこのあたしがガセネタ掴むなんて！」





「っ……んぐ……くっ……!」

ハア…  
ハア…

「ん?どうやら股間が気になって  
上手く動けないみたいね!でも  
いくらいきなりちんぼ生えたらからって  
そんなに邪魔になる?」

「うるさいっ……!くっこの股間のモノ……違和感がある上に  
敏感でどうしても動く時に意識してしまう……っ」

もじ

もじ





「だが上手く動けなくとも魔術で…って…え？  
ま、魔力が上手く練れない？  
体内の魔力循環が股間に集中してる…  
まさか股間の玉に魔力が集められてるのか!」

「ぷっ!あははは!魔力を封じるってそういうことね!  
思ってたのとは違うけど聞いてた話は本当だったみたいね!」





「だが何とかこの玉から魔力を取り出せれば魔術が使えるはず…  
ぬぐ…玉に溜められた魔力を何とか引き上げて…」

「あはは！ちんぽ勃起してきてる！そんなみっともない  
身体になったんだからもう無駄なことはやめなさいよ！」

「魔力が圧縮されるこの感覚…いける！魔術が放てるぞ！」

「う、うそ?!やっぱちんぽ生えるだけの  
しょうもない魔道具なの?！」

「今更後悔しても遅い!くらえ!」





トク!



「わ、わたひの魔力がちんぼの汁に…しょ…しょ…しょんなバカな…」

「さーて戦えなくなったみたいだし  
とりあえずこのちんぼ女を魔具ごと  
持ち帰って…」

ハァ…♡

ハァ…♡

ヒュッ♡

「火涼さんがいたぞ！交戦しているようだ！」

「ちっ！別のやつらが来ちゃったか！  
せっかくの魔具は惜しいけど…ここは逃げるしかないわね！」

「ま、待へえ……」





「くそっ……！鍵刺しめ……！  
よくもこんな身体に……っ！  
絶対に探し出してこのふざけた魔具を  
外させてやる……！」

よた

よた





「あ、ナンバー1だったのにちんぽ生やされて  
よわよわになっちゃった火涼ちゃんじゃーん♪」

「着けられた魔具が身体を覆い隠すものを  
弾いちゃうせいでスーツは極薄のしか着れないし  
股間は丸出しのままなんだって？  
そんな下品な姿で歩き回れるなんて  
流石の図太さだわ」

「ふん…股間の物が不愉快な上に  
ここぞとばかりに低レベルな連中が  
絡んでくるのもこの体の面倒な所だな…」





「はあ？だれが低レベルだって？」

「おまえたちに決まっているだろう  
普段から陰でコソコソと私のことを気に入らないと  
言っていたことぐらいは知っている  
僻んでくる連中の陰口なんてキリが  
ないから相手にもしてなかったがな」





「この…!こんなもん丸出しでうるついでる女が偉そうな  
口利いてんじゃねえよ!」

「あぎい!き、金玉握るなあ!」

「あんたが天辺に居座って依頼をこなしまくるせいで  
こっちに雑魚魔物の掃除くらいしか仕事が  
回ってこなかったんだから  
文句ぐらい言われて当然でしょ!」

「あーほんと目の上のタンコブが  
いなくなっってせいせいするわ!」

クワッ!

ズルズル!

「あ、謝る!わ、私が悪かった!  
悪かったから離してくれえええ!」





「なに？あっさり謝っちゃってプライドとかないの？  
鼻水まで垂らして必死じゃない！その情けない姿に免じて  
離してあげる！」

「あひいゝはひいゝ……………」

「あはははは！なにこいつ勃起してんだけど！  
火涼ってマゾだったの？」

「そういえば、男って金玉握られたりすると子孫残せなくなる！  
って思って本能的に勃起してきちゃうって聞いたことがあるな！」

「何それ！オスの本能が働いちゃってるの？」

「あははははは！脳みその中にまでちんぽが付いちゃってるじゃん！」





「ねえ、金玉握ってこんだけいい反応するんだったら  
射精させてみたらどんな反応するか気にならない？」

「あははは！いいねーそれ！」

「は、はひっ！？こんな所で射精なんてできるわけ……！」

ビクッ！

ガッ！





「うるせー！あんたみたいになちんぼ露出女が普通に  
出歩く許可が出てる段階でおかしいんだよ！」

「上層部もあんたを切り捨てるのがもったいないから  
甘い対応してるんでしょうけど  
こっちはちんぼ生えた女にうるうるされて  
目障りなの！オモチャにされるぐらい当然だろ！」

「んおっ!!やめろ!ち、ちんぼを擦るなあっ!」

ズル♡ズル♡



「んおっ♡や、やめっ…♡  
おっ♡おお〜♡」

A close-up of hands holding a small, pixelated object, with large red Japanese text 'ズリ♡' and 'ズル♡' overlaid.



「女の子の膣内じゃなくて手で抜き出されてる  
無駄撃ち精子だけだね♪」

「さーてあんまり長引かせると他の人がきちゃうかもだし  
フィニッシュさせちゃおうかな!」

「んおおおおお!!ちんぽ抜き加速したり!!  
手の動きに合わせて金玉が  
精子送り出してくるうつ♡」

「お、射精するかな?ザーメンぶちまけるちんぽ女!!」

「射精る!射精るうつ!!♡」

ズリ  
ズリ  
ズリ  
ズリ



「あははははは！すごい勢い！  
しかも量もニオイも凄すぎでしょ！」



「おほお~~~~~んおっ~~~~」  
ほお~~~~」

「あはは何その顔！  
あの火涼がちんぽ生やされた上に  
こんなアホ面晒すなんて最高ね！」

「私たちはそろそろ任務の時間だから  
その床とか壁に付いたドロドロのきったないちんぽ汁は  
自分で掃除しといてね〜」

「ほお〜♡おほお〜……♡」

ピュ♡





「ズル…ズル…」

ハァ…  
ハァ…

「くっ…この身体でも魔粘泥ぐらいは倒せるはずだと思ったが  
ここまで手こずるとは…  
しかしいくらなんでも最下級の魔物ぐらいは討伐出来るはず…  
戦闘の勘が鈍らない様に少しでも現場に出なければ…！」





「ベッ！」

「なり!木の上からも降ってきた!!  
しまった!一匹に時間をかけ過ぎて  
他のやつが寄ってきてしまったのか!」





「うっ、まずい足を取られた！  
し、しかも…ちんぽにまで取りついてきた！  
だが…魔粘泥は魔力器官の多い顔に  
取りつくことが多いはず…  
何故真っ先にちんぽに  
寄ってきているんだ！」



ルッ…  
ズ



「おおお！粘泥がちんぽの先を  
まさぐり始めた！  
ま、まさか私の金玉に溜まった  
魔力に惹かれてちんぽに  
取りついたのか！」





「んひひひひ他の魔粘泥が  
最初のやつとくっついてデカくなってる!!  
んぐうお...グニュグニュした  
感触が気持ちよすぎて  
肉竿ビンビンにおっ勃てて  
粘泥の良い様に扱われてしまうっ!」





「おっ♡金玉持ち上がったってきた♡  
射精る！粘泥の塊にザーメン射精るう！っ♡  
魔力たっぷりの金玉ミルクを  
雑魚魔物に無理矢理給餌させられるうっ！」







「んほおおおおおおおおおおお!!  
魔物の中に射精いいいいいい♥  
溜め込んだ魔力ザーメンを低級モンスター如きにあっさり食べられちゃってるうううう♥」

んほ

ううう♥

ホ  
プ  
ううう!!♥





「はひいー♥はひいー♥  
こいつら精液まで残さず取り込んでいる…っ  
私の精子まで粘泥のタンパク源に  
されてるなんて…っ!♥  
でも、ようやくちんぽから離れたっ…  
は、早く足元の奴らを振り払って脱出を…」

グロ



「おおお！いつの間にかこんな数の魔粘泥が…!!  
もしかしてこいつら全部  
私の精液をエサにする気で集まってきたのか!!」

ズル...

ズッ...





「はひいひいひいひいひい!!また来たあ!!  
ちんぽが定員オーバーだから溢れた粘泥が  
体に取りついてきてるっ♡  
おっっっ♡射精で火照った身体に  
粘泥がひんやり感が心地いい♡  
身体ごとちんぽぬるぐちょに  
マッサージされてるうっ♡」

ズッ!♡

ズニゅ!♡

ズリゅ!♡



ズム!



「おっ♡もう射精るっ！♡  
一刻も早く食事になりつこうとする  
食欲な精液捲りで一発射精済みの  
敏感ちゃんぽ速攻射精しちゃうっ！♡  
イぐっ♡イぐうううっうう！♡」

ズッ！♡

ズニゅ！♡

ズッ！♡



「おほおおおおおおおお!!  
二回目のザーメン配膳なのに  
大盛り射精るっっ♡  
全身の粘泥のプルプルボディに  
濃厚白濁液で  
ねっちより感追加ああっ♡」





「ひいひい！イってる！イってるのにまだちんぽ  
こねこねされてりゅうううう！！  
全身の粘泥にエサザーメン行き渡るまで休みなしの  
ちんぽ給仕っ！金玉ミルクサーバー強制稼働で  
おかしくなるううううう！！」

ビュッ♡

ビュッ♡





「……………は…あ……………はひ……………っ♡  
ち、ちんぽも金玉もしなしになんて  
やっとなかなくなつたあ……………  
自分のちんぽ汁と粘液で身体もみくちやにされて  
雑魚魔物に完全敗北……………  
こ、こんな様じゃ古代魔具の  
取り締まりはおろか最低ランクの  
討伐任務すらこなせない……………」





「お前がある筋では有名だという魔女か  
なんでも性に関するあらゆる薬を調合することが可能だとか」

「ひひひ確かにそうさ流石にいきなり丸出しで  
現れたのはあんたが初めてだけだね  
かなり厄介な呪いをかけられてるようだね」

「話が早くて助かる！」

「お前の薬でこの男性器を取り去ることはできないか!!」

「すまないがそれはおそらく無理さね

薬を飲んだ瞬間はちんぽがなくなると思うが

その魔具を着けている限り

すぐにまた同じ物が生えてきちゃうだろうね」

「くっ……やはりダメか……」





「見たところあんたの悩みどころはちんぽが生えてるのも  
そうだが、そのちんぽと金玉が勝手に魔力を使って  
精虫を作っちまってるってこともあるんじゃないかい？  
そっちを何とかする薬なら作れるかもしれないよ」

「なに！本当か！」

「まあね。余計な詮索をする気はないが  
そんな魔具を引っ付けてるってことは  
なにか面倒な事に関わってるんだろ？  
ならその金玉に溜まっちまってる魔力を  
使えるようになりたいんじゃないかと思ってね」

「ああ！ぜひ頼む！」

「あい分かったよ。それじゃ…」





「ほい！ちんぽおっ勃ててそいつに射精しな」

「…は？な、なんで…？」

「なんでって調合に使うに決まってるだろう  
その呪いで生えたマラには普段使う材料だけじゃ  
効きそうにないからね  
あんた自身の種汁を触媒に何種類かの材料の組み合わせを  
試していくのさ」

「なりほ、他の材料でなんとか代用とかは…」





「何言ってるんだい！調合なめるんじゃないよ！こっちは50年以上ちんぽの薬を作ってきた経験から最適な方法を弾き出してるんだ！文句があんなら帰んな！」

「くっ！わ、分かった！今更それぐらいことやってやる！」  
「そうそう年寄りの言うことは素直に聞いとくもんだよ」

グ  
ッ♡





「ん…？なかなか勃たないね。若いのにどうしたんだい！」

「いきなり言われた上にアンタがずっと見てるんだ！  
そんなに簡単に勃つか！」

ハ  
ア  
ハ  
ア

「まったくちょっとと見られてるぐらいで  
最近の若いのは情けないねえ…しょうがない  
それじゃあ…」

スコ  
♡  
スコ  
♡





「ほれ！こいつを飲みな！」

「むぐうっ！な、なんらこれは！」

「いいから飲み込みな！すぐに分かるよ！」



グ  
イッ



「ひいひい！な、なんだ!!  
き、急にちんぽがバキバキに硬くなってきた!!」

「アタシの特製精力剤さね。これを飲めば  
どんなへにゃチンでも金棒みたいにカッチカチ  
ちんぽ汁出すことしか考えられない  
獣になるって代物さ  
しかもそれだけ強力でも一発出したら  
ちやあんとスッキリできるようになってるから安心しな」





「そうそうちんぽ扱くときやそうじやなきやね  
あたしや軟弱なちんぽ扱きする男が嫌い…  
ってあんたは女だったね、まあいいさね  
とにかく出すもん射精しちまいな」

「おおおおおお!!もう精液上ってきた!射精る!オス性欲ギンギンのエキス射精るう!♡」

ダース



「んぐおっほおおおおおおおっおお!!♡  
せーしびゆるびゆるきもちいい〜♡  
桶いっぱいにくっさいちんぽミルク射精るうう♡」

「ひっひっひ、ちんぽおっ勃てるだけで  
もたついてた割にはいい勢いの射精だ  
やりやできるじゃないか」





「はひっはひっはっ♡」

「よしよしちゅっどぞらっをぶっしゅめな  
まっはっしゅを混ぜっ…」





「よし出来た！まずはそいつをグイっといってみな！」

「はへ？精液を材料にするとは言ってはいいたが  
これって精液に薬草の粉を混ぜただけじゃ…  
もっとう丸薬にするとか…  
飲みやすくする加工は…」

「ほとんど」から作るんだ！いちいちそんなこととしてたら  
いつまで経っても終わりやしないよ！  
ほら、さっさと飲みな！」





「くっっ！……分かった！飲めばいいんだな！  
ぐっ！うぶっ！ゴグッ！ゴグッ！」

「ひっひっひ、肚が決まったようだね  
なかなかいい飲みっぷりじゃないか」

「うっ……ごぶっ！喉に絡みついてくる上に  
ニオイが鼻の中いっぱい広がって……っ！  
ゴボっ！んぐぶっ！」





「んぐっ……ぶはあ!!はあはあ……!!  
の……飲んだぞ!」

「何か身体に変化はあるかい?」

「うぷっ!……喉や口の中、それに腹の中にまで  
へばりつくような不快感はあるが……  
身体的な変化は……特にないな……」

「……ふむ少し待っても特に反応はないね  
じゃあ次はこの組み合わせだ」





「うぐっ…！くそっ！ゴグッ！ゴグッ！」

「おおそうだ、精液が足りなくなったらまた  
射精して補充してから飲んでもらうからね  
そうさね…あと10通りぐらいは試すよ」

ゴグッ！♡

ゴグッ！

ゴグッ

「んぐっ！んん…っんぐっ！んぐっ！んぐっ！んぐっ！」





「げーーーーーっふ……!!♡うぶ……っおえっふ!!」

「ふむ…この組み合わせならいけそうだね  
よくやったねこれで薬が作れそうだよ」

「んげぶうっ…!!♡腹が精液でパンパンだ……  
じ、自分の精液がぶ飲みするハメになるなんて…  
鍵刺しのやつめ…見つけたら絶対にただじゃおかないぞ…」





「ついに追い詰めたぞ！今度こそ貴様を捕らえ  
この魔具を外す方法を吐いてもらおうぞ！」

「う、ウソでしょ！魔具が着いたままで…  
なんで魔力が使えるようになってるのよ！」





「あの魔女が作ったのは  
回復薬と精力減退薬を組み合わせた物だったが…  
精液を抜ききってから飲むことで  
射精後の体力を回復しつつ  
魔力を奪う機能を封じるのに成功した！」

だが効果は長く持たない上に副作用も確認できてないと  
言っていた早急に決着を着けなければ！」

「くっ！油断したわ！けどね、その魔具を着けてる限り  
あんたに勝ち目はないのよ！」





「なり!!魔具が膨れ上がってる!!」

「古文書を探ってその魔具の  
真の機能を突き止めてやったの!  
装着者にちんぽを生やしてその魔力を  
精液に変換するだけじゃなく  
魔力を注ぐことで自由自在に変形するのよ!」

「な、なんだと?!」



ゴ  
ゴ  
ゴ  
ゴ  
ゴ

ッ!  
ッ!  
ッ!  
ッ!  
ッ!



「くっ！う、動けない！  
まさかこんなことまで可能な魔具だったなんて…！」

「あははははーちんぽと顔だけ出でて最高に滑稽ね！  
良い様だわーちんぽが生えても頑張つてあたしを捕まえようと  
したけど残念でしたー♡」





「それじゃ下手に暴れられても困るし  
魔力精液を搾りきって完全に抵抗できなくなしてから  
奴隷にしてあげようかな♡」

「な?」

「さーてちんぽ扱きにはどんな形が良いかな…」





「こんなかんじでどうかかな?♡  
ちんぼリングを動かして金玉ミルク搾り出してやるわ♡」



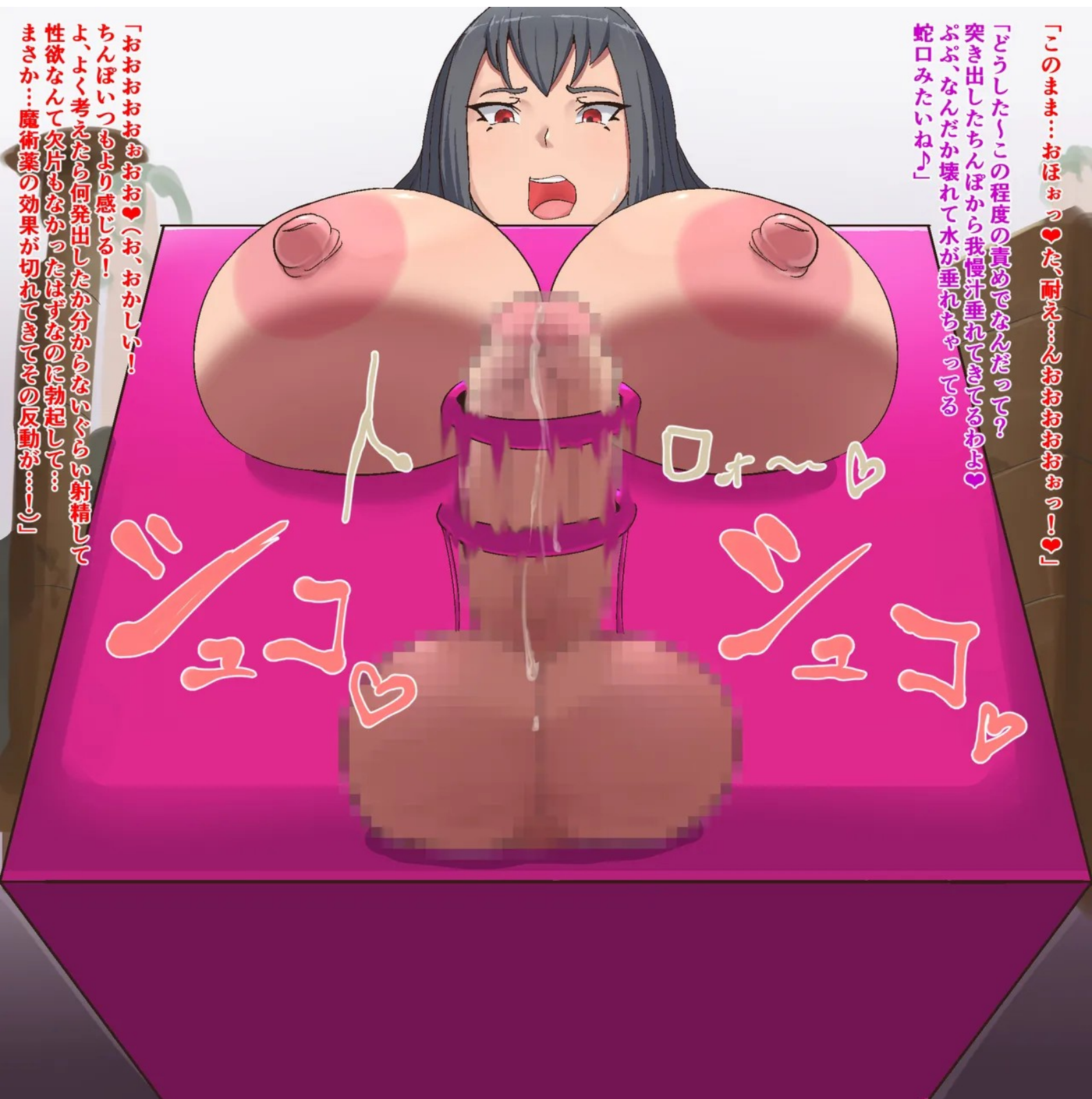
「んっ…ふん!こんな程度の責めで射精なんかしない!  
(普段ならあつという間にちんぼに脳が支配されてしまうが…  
ここに来るまでに精液は抜ききってきたから  
ちんぼ責めにもしばらく耐えられるはず!  
やつが油断してこのキューブを大きく変形させた隙に  
魔力を一気に解放して吹き飛ばしてやる!」



「このまま…おほおっ♡た、耐え…んおおおおおっ！♡」

「どうした！この程度の責めでなんだった？  
突き出したちんぽから我慢汁垂れてきてるわよ♡  
ぷふ、なんだか壊れて水が垂れちゃってる  
蛇口みたいね♪」

「おおおおおおお♡（お、おかしい！  
ちんぽいつもより感じる！  
よ、よく考えたら何発出したか分からないくらい射精して  
性欲なんて欠片もなかったはずなのに勃起して…  
まさか…魔術薬の効果が切れてきてその反動が…！）」

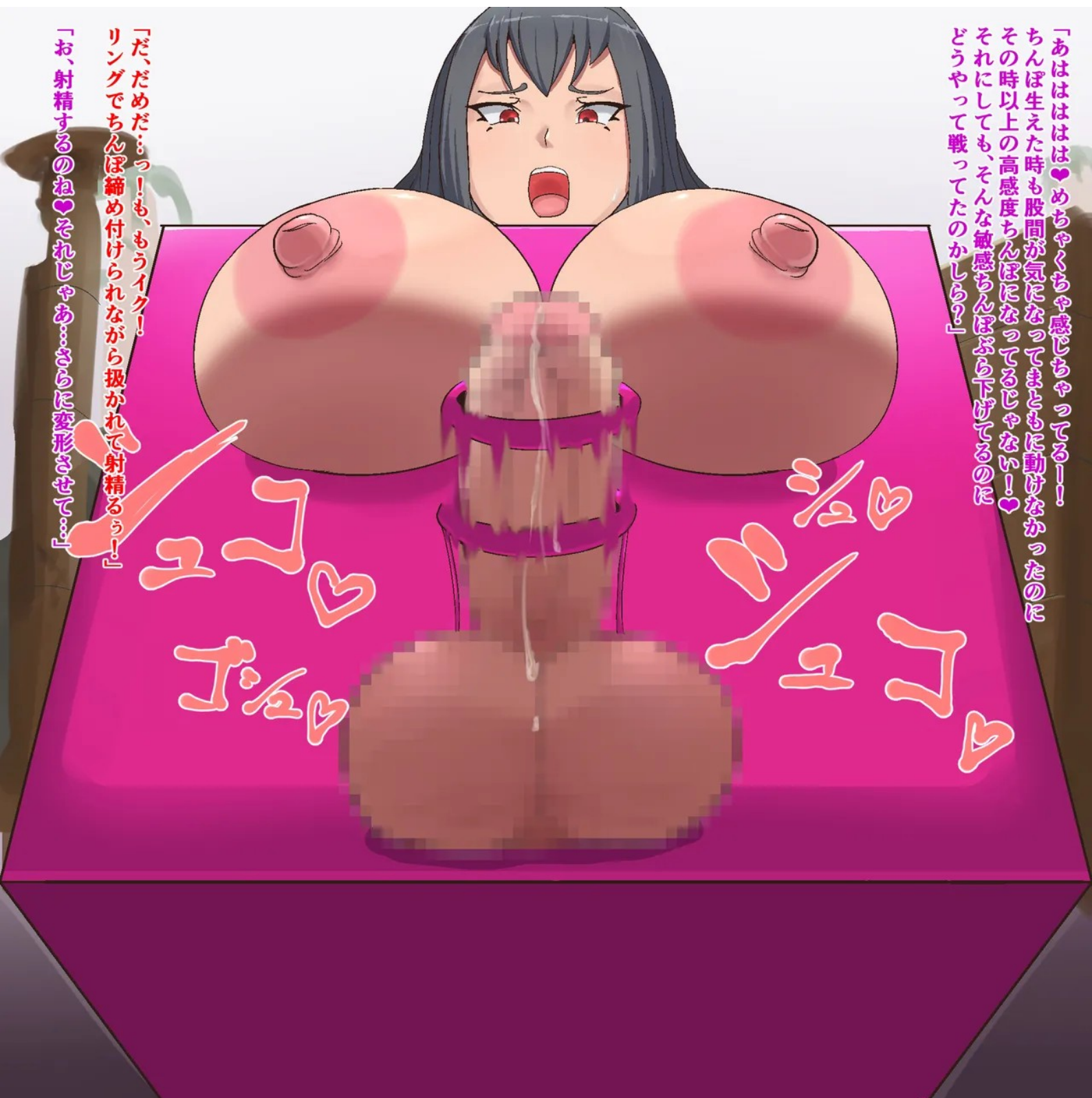


「あははははは♡めっちゃくちゃ感じちゃってるー！  
ちんぽ生えた時も股間が気になってまともに動けなかったのに  
その時以上の高感度ちんぽになってるじゃない！♡  
それにしても、そんな敏感ちんぽぶら下げてるのに  
どうやって戦ってたのかしら？」

「だ、だめだ…っ！も、もうイク！  
リングでちんぽ締め付けられながら扱われて射精するう！」  
「お、射精するのね♡それじゃあ…さらに変形させて…」

ユコ♡  
ゴ♡

ジュ♡  
コ♡





「おほおほおほおほおほおほ！  
散々射精したクタクタちんぽのはずなのにっ  
金玉が作った精液ゴブゴブ押し上げて  
射精するうううううう！」

「はーい♥なんかいっぱい抜いてから来みたいけど  
あっさり一発目射精♥  
変形させたリングをちんぽに纏わりつけて即席ゴムにしてみたから  
あんたのきつたないちんぽ汁が飛び散らなくて済むでしょ？」



「おひひひひひ！しゃ、射精止まらないっっっ！」

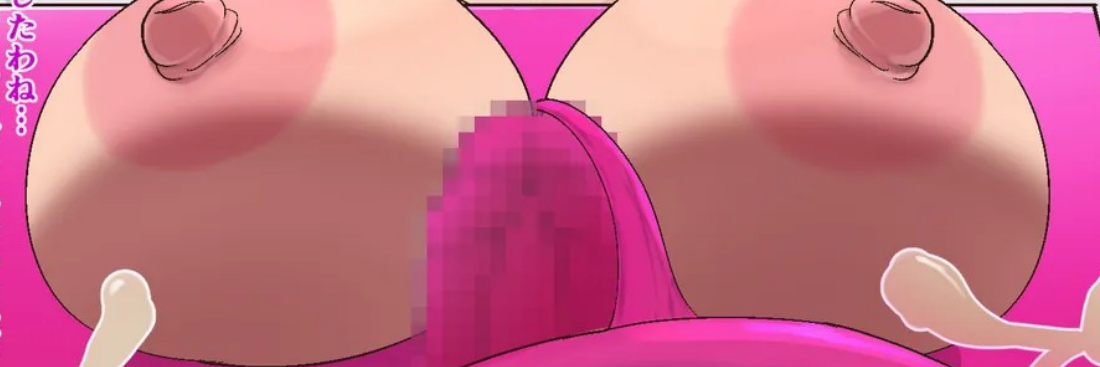
「…ちよっ！あんただんだけ射精すんのよー！」

「しゃ、射精とまらなひひひ！  
ま、まさか魔術薬の副作用でっ！  
あひっ！おひひひひひひんっ♡！」





「あひい~~~~~♡はひ~~~~~♡」



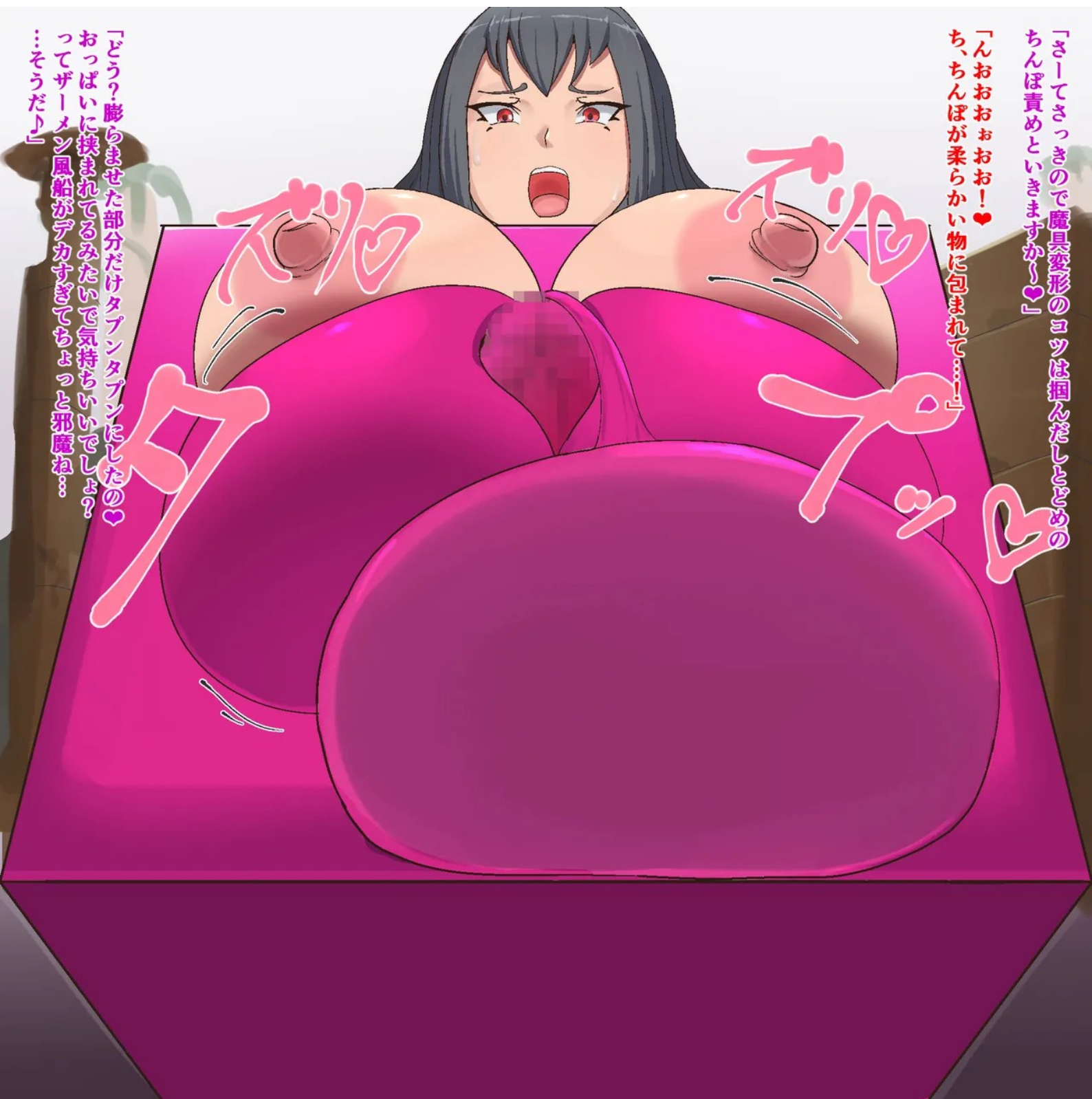
「とんでもない量出したわね…  
最初に射精したときはこんなバカみたいな量じゃなかったハズ…  
そういえば射精してる時に副作用って言うけど  
さては変な魔術薬か何かを使って戦えるようになってたのね  
そんな特殊な薬作ってまでリベンジしてくるなんてね」

「ま…まずい…今の射精で…もうほとんど使える魔力が……」

「さーてさっきので魔具変形のヨツは掴んだしとどめの  
ちんぽ責めといきますか〜♡」

「んおおおおお！♡  
ち、ちんぽが柔らかい物に包まれて……」

「どう？膨らませた部分だけタブンタブンにしたの♡  
おっぱいに挟まれてるみたいで気持ちいいでしょ？  
ってザーメン風船がデカすぎてちよっと邪魔ね…  
…そうだ」





「風船の中のザーメン全部  
あんたのケツ穴に流し込んであげるわ♡  
自分が射精したんだから  
責任を取って自分の中に仕舞わなきゃね♡」

ホッ

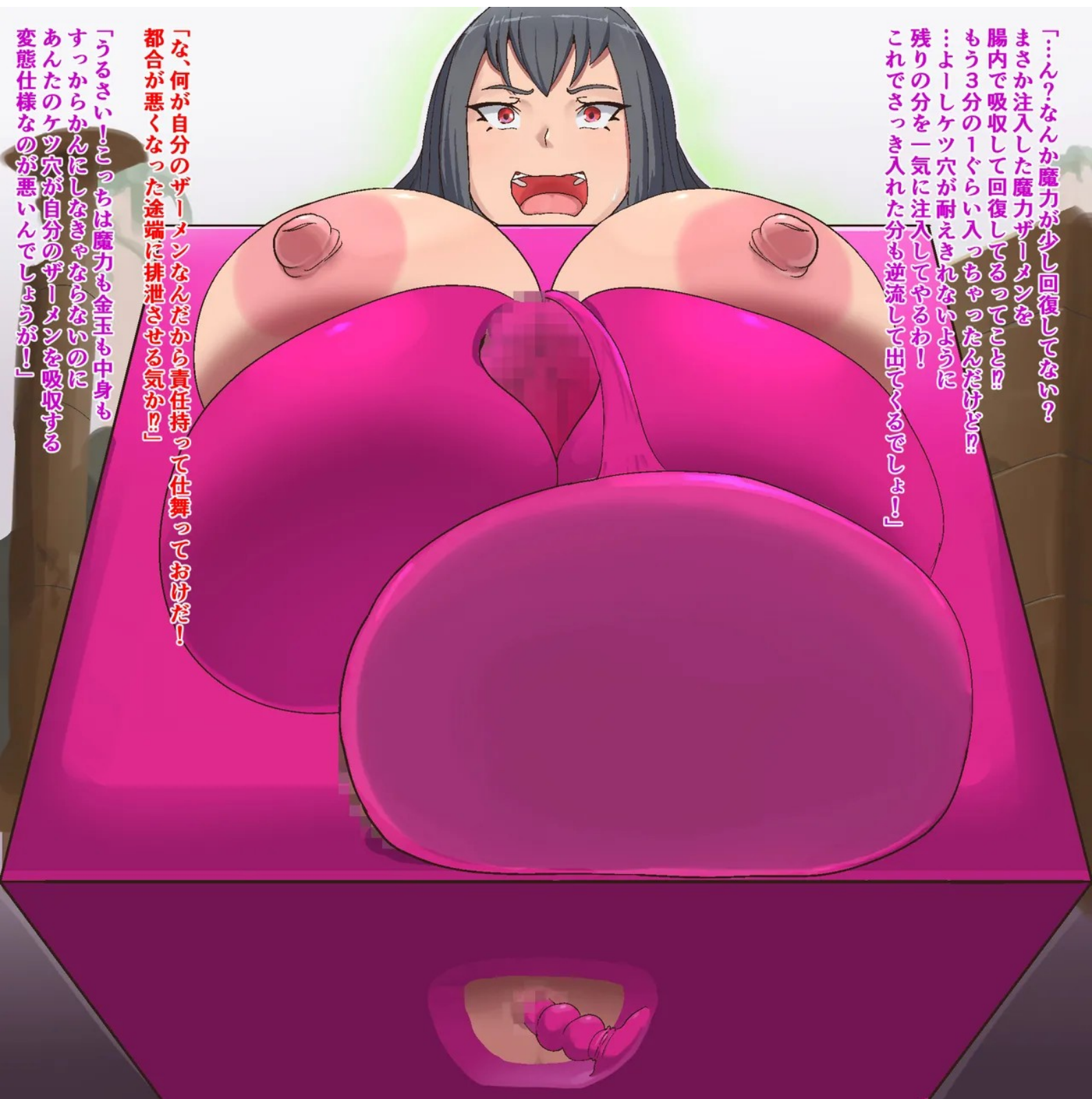
「は、腹の中がゴボゴボいってザーメンが侵入してきてるっ！  
ん？だが…この感覚は…」

トクッ トクッ

「…ん？なんか魔力が少し回復してない？  
まさか注入した魔力ザーメンを  
腸内で吸収して回復してるってこと？！  
もう3分の1ぐらい入っちゃったんだけど？！  
…よしケツ穴が耐えきれないように  
残りの分を一気に注入してやるわ！  
これでさっき入れた分も逆流して出てくるでしょー！」

「な、何が自分のザーメンなんだから責任持って仕舞っておけだ！  
都合が悪くなった途端に排泄させる気か？！」

「うるさい！こっちは魔力も金玉も中身も  
すっからかんにしなきゃならないのに  
あんたのケツ穴が自分のザーメンを吸収する  
変態仕様なのが悪いんでしょうが！」





「おらっ！バカみたいに大量射精したちんぽ汁全部ぶち込んでやるわ！」

「おおおおおおおおお、腹が苦しいっ！  
ケツ穴がひくついて腸内に溢れた液体を  
排出しようとしてるっ！  
だ、だがこれ乗り越えれば魔力を一気に回復させられる…っ！  
な、なんとか耐えて…っ！」

A pink-themed illustration featuring stylized Japanese text. On the left, the character '人' (person) is written in a large, bubbly, pink font. To its right, the word 'ドム' (Domu) is written in a similar bubbly, pink font. In the center, there is a small, round, pink object with a face, possibly a character or a piece of food, with some motion lines around it. The background is a solid pink color with some darker pink shapes.

「無駄な抵抗するな！ほおら、ケツ穴が頑張っているとこに  
擬似パイズリも追加ー！♡ちんぼとアナルの同時責めで  
ザーメンぶちまけろ！」

「おおおおおおおおおおおお！！  
も、もう我慢無理っ！肛門ガード決壊する！  
ちんぼ穴とケツ穴から精液噴き出してイグううううう！♡」











「くっ…なんて強さ…!!」  
「撤退!撤退よ!」

「ふっ…ふっ…ふっ…」

「ふふーん魔具のスペシャリストである私が  
No.1魔警の火涼ちゃんに  
最適な魔力循環を計算した魔具鎧を装備させた  
奴隷魔具戦士だからね!  
そんじょそこの魔警じゃ相手にすらならないのよ!」





「ふむう…ふぐうー!♡」

「なに、射精したいの?なるべく体内の魔力量  
減らさないように数日間射精させてなかったからな  
ま、金玉に魔力が溜まりすぎても良くないし  
そろそろ出させてあげようかな♡  
今日は新たな魔具も手に入って気分がいいから  
何か新しい方法で……………  
…いいこと思いついたわ♡  
鎧を一旦解除するから気を付けの姿勢になりなさい♡」

ビクッ  
ビクッ





「はあ…はあ…♡こ、これでいいんだなっ！  
早く射精させてくれっ！ちんぽがもう限界だ！♡」

「まーだ奴隷の自覚が足りてないようね  
射精させてほしい時はどう言うんだっけ？」

ピン♡

ピン♡





「す、すみませんでしたっ!♥  
ちんぽ奴隷の火涼!股間のザーメン袋がパンパンで  
中の臭ミルクを排泄したいですっ♥ちんぽも一生懸命振って  
アピールしますのでどうか射精許可をお願いしますっ♥  
（こ、こんな情けない姿…魔警として最低なのに…  
今はとにかく射精!射精したいいいい!♥」

「よくできました♥それじゃ  
従順な肉竿付き女剣士の火涼ちゃんが  
気持ちよく射精できるように  
ご主人様が魔具を変形させてあげようかな♥」

ガン♥

ハッ♥

ヘッ♥

ガン♥





「魔具が全身に薄く広がってる…!ご、ご主人様これはいったい…」

「以前あんたのちんぽに膜を被せてザーメン受けにしたでしょ?それを今度は全身にピッタリ貼り付けてあんたをマネキン人形みたいにしちゃおうかなって♡」

なんにも見えない状態で全身を圧迫されながらちんぽ汁出させてあげる♡」

「くっ♡はぁ…はぁ…っ♡」

ズ

ワッ♡



「はい、ちんぽ女奴隷の密封完了！❤  
頭の先までピッタリ張り付いてるけど  
火涼ちゃんが金玉で一生懸命濃縮した魔力が通ってるおかげで  
そんなに息苦しくないでしょ？❤」

「ふう〜❤ふぐう❤むぐう❤」

「顔も覆われて誰だかわからない下品なちんぽ人形にされても  
興奮してるみたいで結構結構❤それじゃ…」

シ

ピク  
ピク  
ピク

チンポ



「おまぢかねのちんぽ搾り開始〜♥  
ザーメンたっぷり吸いだしてあげるわ♥」

「むふうっ!♥んぶふうっ♥んん~~~~~♥」

ビクッ♥  
ビクッ♥

だっ♥  
おっ♥  
がっ♥  
おっ♥

「何言ってるかはわからないけど、とにかく  
熟成された金玉汁を外に出せるのが嬉しいみたいね♥  
ちんぽの気持ちよさに負けて奴隷になってるぐらいだもんね♥」



「むぐうつ♡うぐう!♡」

「ん?腰振りしだしちゃってもう射精なの?  
まあ溜まってみたいだし仕方ないか♡」

「むふっ♡ふううううっ!♡」

ちんぽの先まで  
コーティングしてあるからそのまま射精して  
お得意のザーメン風船作りしちゃうなさい♡」

だっポッ♡

ハッ♡

だっ

ポッ♡

ハッ♡



「~~~~~」

「射精してる♡射精してる♡  
ちんぽマネキンになっちゃってるから  
わからないけど、どうせまたアホ面で  
精子どぴゅってるんだろなあ♡」

「村精してる♡村精してる♡」

ボク

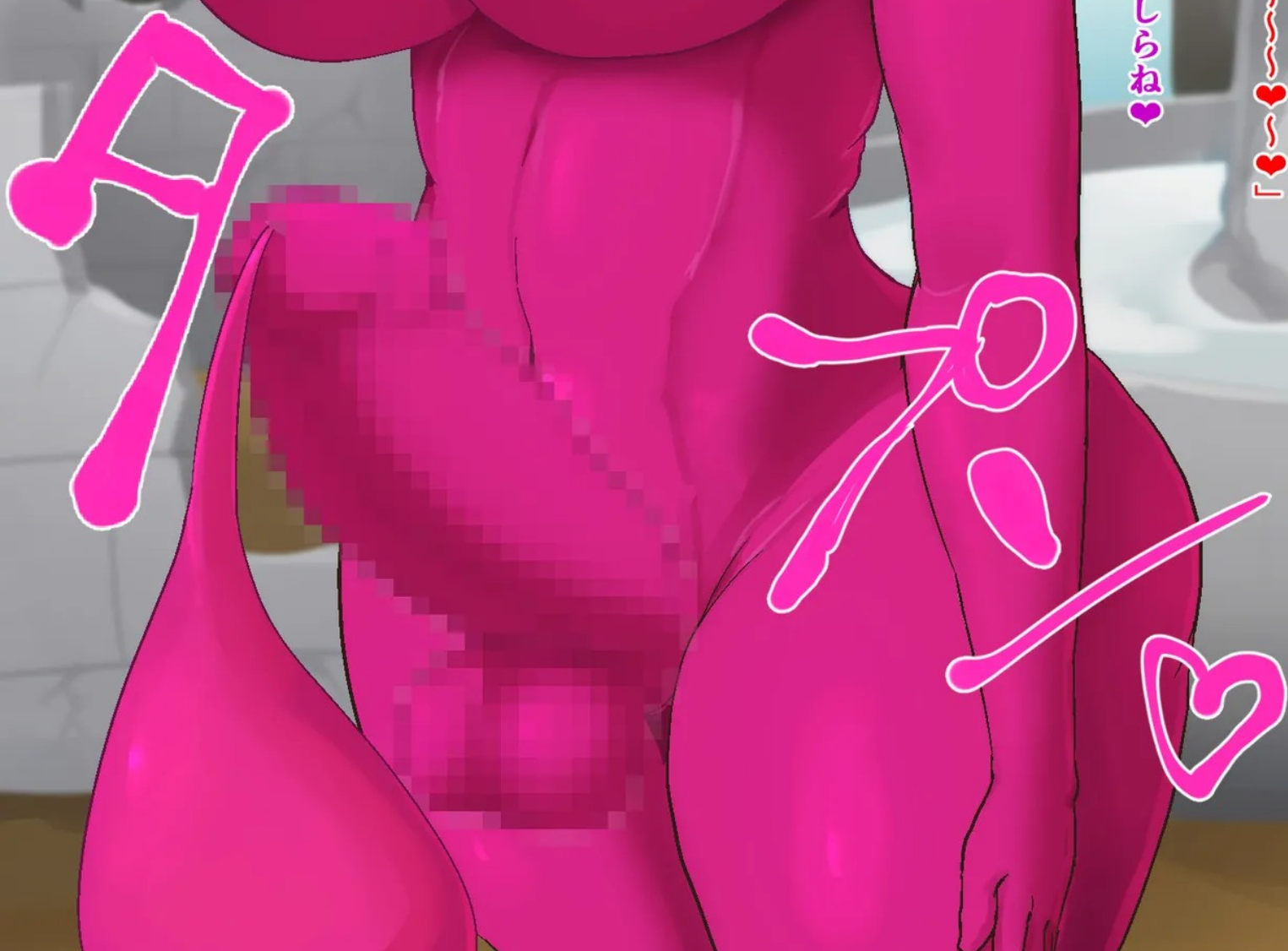
ビブ♡♡



「んふううう~~~~~♡♡♡ふう~~~~~♡♡♡」

「これまた大量に射精したわね♡出す度に射精量が増えてるのは魔具の力が身体に馴染んできたせいかしらね♡」

さーてちんぽ女の射精処理も終わったし  
汚いザー汁を外に出すために風船に穴を開けて…」





「むぐお!!」

「あっしまった!元のピッタリ型に戻しちゃった!」

「むおおお!!♡むぐうううっ!♡」

「あちゃ〜これってもしかして  
風船の中に入ってたザーメンが全身に  
いきわたっちゃってるんじゃない?」

ビュ

チッ!



「むふぅ〜…っ！じゅるっ♡むふぅ〜……………」

「へ？またちんぽビクビクしてる？  
まさか自分の精液漬けになって興奮してんの？」



「あゝおー♡むふぅ〜……………」



「むぐおおおおおっおお♡ふんぐおおおおおおおお」

「あはははははは！自分の精液漬けになって興奮しすぎて射精しちゃってる!!」

「どんだけ変態なのよ火涼ちゃん!♡  
働き者の上にこんなになに笑わせてくれるなんて  
最高のちんぽ奴隷ね♡」





「ふう〜〜〜〜ん♥ふう〜〜〜〜ん.....♥」

「二発目の変態射精も終わったみたいだし  
今度こそ全身の膜を剥がすわよ♥  
さあてザーメンの中身どうなってるのかな〜♥」





「精液まみれのド変態ちんぽ女が登場〜…ってうわっ！  
すんごいニオイ！♥」

「はへえ〜……………♥  
はへえ〜……………♥  
体中がくっつきいちんぽミルクでヌチャヌチャになって……  
全身ザーメンパック射精すごすぎりゅう……………♥」

「あちゃ〜こりゃド下品射精中毒になっちゃうかもね♥

まあちんぽのことで頭が一杯の方が従わせやすく助かるわ♥

これからもあたしの奴隷としてビシバシ働いてもらうからね〜♥」

「はひい…♥」

















































































































































































